

右手でコマを回転させながら左手を少しずつ離していくと、自然に撚りがかかっています。2つの手のタイミングで糸が細くなったり太くなったりするので、最初は観察しながら慎重に。



もっとやりたい！ という気持ちを胸に抱きつつ、母屋へ戻って町田さんから和綿の話听取了。





町田さんは古布のコレクションを見せてくださいながら、昔の農家の暮らしについて話してくれました。昔はどこの家でも綿をつくっていたこと、だけれど貴重品だったこと、継ぎ当てして大事に着続けていたこと、布団をつくるのにも足りなくて、古くなった服を入れていたことなど、寒い地方では一家全員がひとつの夜具にくるまって暖まりながら眠っていたことなど。ものが何でもある時代に育った私たちにはなかなか実感が持てないお話が次々に出てきました。しかも日本ではほとんど綿がつくられていません。では私たちが着ている衣服の原料は。どこからどうやって届いているのでしょうか？

そんな疑問には、町田さんと一緒に和綿の商品化に取り組んでいる株式会社豊島の溝口さんが答えてくださいました。



愛知県に本社がある株式会社豊島は1841年（江戸・天保12年）の創業で、綿化、羊毛、原糸、テキスタイルなどの輸入をしている商社。2008年から「orgabits オーガビッツ（オーガニック+少しの）」というロゴを推進し、通常のコットンとオーガニックコットンを混ぜて使用し、オーガニックコットンの使用量を少しずつ増やしていこうという取り組みを進めています。

綿花畑は世界の農地の2.5%にすぎないにもかかわらず、殺虫剤は全使用量の約16%を占めています。また、化学肥料や除草剤の使用量も全世界の約10%に上っています。棉栽培をオーガニックに変えるだけで、たくさんの農薬、化学肥料の使用をおさえることができるのです。

オーガニックコットンは他の農産物同様、3年以上、無農薬無化学肥料栽培を続けた畑で栽培されて初めて認定されます。豊島ではアメリカのテキサスを中心に綿を仕入れ、日本で加工し、製品化しているのだそうです。

豊島が定めたオーガビッツの条件は、

- 1、オーガニックコットンを10%以上使うこと
- 2、オーガニックコットンの混率を正しく表示すること

少しずつでいいからオーガニックへ移行し、農薬や化学肥料の使用で疲弊した土地や、体調を壊して苦しむ農家の負担を減らしていきたいと、活動を続けています。

渡良瀬エコビレッジでも農業体験、社員研修をしている他、和綿を使った商品の開発にも取り組んでいく予定だそうです。今後の展開が楽しみです。



オーガニックの野菜に、自家製豆餅、おせんべいと、おいしいものをいっぱい買い込んで東京へと向かいました。

帰りのバスの中では、もっと詳しく深く学びたい、糸紡ぎにチャレンジしたいという参加者からの声が多く寄せられました。なんだか和綿ブームがやってきそうな気配です。

次回開催する時には、栽培から加工まで一緒にやれたらいいですね。夢は膨らむばかりです。